十七歳だった！

原田宗典

HARADA-MUNENORI

17-SAI DATTA

集英社文庫

集英社文庫

十七歳だった！

1996年6月25日　第1刷

定価はカバーに表示してあります。

著　者　原田宗典

発行者　若菜　正

発行所　株式会社　集英社
東京都千代田区一ツ橋2—5—10
〒101-50
電話　東京　(3230) 6100（編集）
(3230) 6393（販売）
(3230) 6080（制作）

印　刷　中央精版印刷株式会社

本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

落丁・乱丁の本が万一ございましたら、小社制作部宛にお送りください。
送料小社負担でお取り替えいたします。

© M.Harada 1996

Printed in Japan

ISBN4-08-748490-4 C0195

集英社文庫

十七歳だった！

原田宗典

目次

十七歳の前口上　7
どうするんだ恋心　17
授業中のピンチ　35
煙との遭遇　45
初サボリの顚末　64
夜を走るエッチ約一名　75
カッチョいい家出　94
十七歳のファッション　122
年上の女との邂逅　132
文学青年への道　142
うれしハズカシ体育祭　152
バイクに乗りたい！　172
コンドーム秘話　191
ああ青春の賭事　201
あとがき　211
解説・山田詠美

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

十七歳だった！

十七歳の前口上

高校生の頃の話をしようと思う。

どうしてそんな昔の話をしようと思い立ったのかというと、理由は単純だ。ぼくは今、忘れ始めている。あんなに楽しくてムチャクチャ充実している一方で不満だらけだった鮮やかな時間が、遥かに遠くなって霞み始めているのだ。

ぼくは今や三十四歳で、「白髪の目立たなくなるリンスができました」なあんてCMを見ると、思わず身を乗り出してフムフムと鼻の穴がおっぴろがっちゃう程度におじさん化が進みつつある。そういう自分がイヤで、意識的に自制しているにもかかわらず、ふと気がつくと、風呂へ浸かる際に、

「うーっしゃあ！」

などと声を上げてしまったり、手拭いを頭へ載せて、

「んー極楽極楽」

などと呟いている。あるいはゴハンを食べた後に（以前はそんなことだけは絶対にすまいと心に誓っていたにもかかわらず）つい爪楊枝で歯の隙間を掃除しつつ、

「しーはしーは」

などと音を立てている自分に気づいたりする。あるいは汗だらだらの真夏日に涼しい喫茶店で冷えたオシボリを出されると、掌や顔は言うにおよばず、

「うー、腋の下も拭きたいッ。拭いて拭いて拭きまくりたいッ！」

という怒濤の欲求を抑えるのに一苦労したりする。

これはもう、まごうかたない〝にっぽんのおじさん〟ではないか。何ちゅうかこう、取り返しのつかない年齢になってしまったのうズビズビ（飲茶音です念のため）という感じである。

こういう年齢に突入すると、記憶力というのも必然的に減退してくる。ついこの間まではハッキリ覚えていた思い出が、どことなくボンヤリしてくる。それが大切な思い出であることは分かるのだが、まるで曇りガラス越しに見た人影のように、輪郭すら曖昧になってくる。

ぼくの場合、どういうワケか幼年時および少年時の記憶は我ながら信じられないほど明確に残っているのだが、中学へ入学したあたりからボンヤリし始めている。このままでは

大切な高校時代の記憶も、おじさん化が進むにつれて、どんどんボヤけていってしまうのではないか。それはマズイ。何とかその思い出をつなぎとめておくために、一刻も早く文章にして残しておきたい。残してどうするのだ、と訊かれると返答に詰まっちゃうけど、とにかく残しておきたい。いいじゃないの本人がそう言ってるんだからッ。あたしのことは放っておいてよッ。

……というような思いにかられて、高校時代の思い出を綴ることにしたのである。

したがって本当なら、本書のタイトルは『高校生だった！』と命名すべきところである。しかし何だかそれじゃあんまりだわ、青少年白書みたいだわ、やだわやだわ、という思いもあって、何となく響きのカッチョいい『十七歳だった！』というタイトルに落ち着いたのである。だからタイトルとは矛盾してしまうが、ここに描かれるぼく自身の年齢は十五歳だったり十六歳だったりする場合もあることを、前もって断っておきたい。そういう細かい所で揚げ足をとって、

「原田嘘つきッ」

などと糾弾しないように。そこんとこひとつ、よろしくお願いしますね。おじさんをイジメないでね。ね。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

さてぼくが高校生になったのは一九七四年つまり昭和四十九年のことである。

うへー。今、びっくりしてパンツずり落ちてしまった。昭和四十年代！　大昔もいいところではないか。そんな昔のことになってしまったとは、思ってもみなかったなあ。あーヤだヤだ。おじさんになるワケだわ。

と、愚痴を言っていても始まらないので、先を急ごう。

昭和四十九年、ぼくが入学したのは操山高校という名前の県立高校であった。正式名称は「岡山県立岡山操山高等学校」というのだが、何だかヤケに岡と山がたくさんあって回りくどい。岡山県立岡山操山高等学校岡山県立岡山操山高等学校岡山県立岡山操山高等学校と三回唱えると、頭の中がすっかり岡と山で一杯になって気が狂って死ぬ、という呪いが籠められているのではないかと疑うばかりの回りくどさである。したがって誰もこの高校を正式名称で呼ぶ者はいなかった。地元の人々は学生を含めてみんな、単純に「ソーザン高校」と呼んでいた。

もともとぼくは新宿の生まれで、中学卒業までは三多摩方面で育った。それなのに何故高校は岡山県立だったのか？　このへんの経緯を話し出すとキリがないので割愛させていただくが、簡単に言うとまあ家の事情である。父親の転勤に伴って家族が岡山へ引っ越すことになり、ぼくは渋々岡山の県立高校を受験した末に、ぱんぱかぱーんと合格した、と

いうのが大まかな流れである。
だからぼくは岡山に対して、何の予備知識も持っていなかった。そこにある県立の高校についても、ほとんど何も知らずに受験したというのが本当のところである。
ところが入学して驚いた。この高校はかなりの進学校だったのである。当時は毎年十人から十五人を東大へ送り込んでいたほどだから、そのレベルの高さは推して知るべし、である。その事実を知ったぼくは、
「いやー、よく入れたなあ」
と我ながら呆れた。どうせ田舎の高校だからと高をくくり、まったく緊張せずに試験を受けたのが幸いしたのであろう。正直言ってぼくはあまり頭のよくない中学生だったのである。特に理数系がまったくダメで、二次方程式とか関数とか集合とか証明とか言われちゃうと、頭の中が中華風卵スープのように沸騰し、段々目が寄ってきてタリラリランのコニャニャチワ状態に陥った挙句、
「おでかけですかレレレのレー！」
と海に向かって叫びたくなっちゃうのが常であった。この傾向は現在にも尾を引いており、海外へ出掛けて外貨を円に換算する必要が生じた場合に、
「えーと、十四ルピアが一円だから、七万八千ルピアは……えーと。うううー」

などと考えている内に耳から煙がもくもくと生じ、あっというまにレレレのおじさんに変身してそこらじゅう箒で掃きまくっちゃうもんねー、といった事態に陥ることもしばしばである。

つい話が横道へ逸れてしまったが、とにかくそういう劣等生であったぼくが、進学校である岡山県立岡山操山高等学校（ええーいまどろっこしい！）へ入学できたのは、まさに奇跡的な幸運であったという他はない。しかしまあ入試のいいところは、勝てば官軍。入ってしまえばこっちのモノ、という点である。ぼくは何食わぬ顔で優秀な高校生たちに仲間入りし、

「ぼくって頭いいんだもんね。進学校なんだもんね。うりうり」

と胸を張って登校し始めたわけである。このへんの調子のよさは、サザエさんとこのカツオにも勝るとも劣らないものがある。我ながら自慢である。

しかしながら、そういう調子のよさを誇っていたぼくにとっても、東京と岡山という環境の劇的変化は、かなり馴染みにくいモノを内包していた。

まず第一に言葉の違いというモノがある。同じ日本語なんだから大した違いはなかろうという意見もあろうが、どうしてどうして。岡山弁というのは、結構スゲエのである。基本的には広島弁と似ているが、まあ標準語と比べると、かなり理解に苦しむ単語が目白押

しなのである。例えば入学間もない頃、授業中にぼんやりしてたぼくに向かって、現国教師がこんなことを言った。

「あんごおじゃのうおめえは」

ぼくは一瞬、どういう反応を示せばいいのか分からずに「でへへへー」と苦笑いでその場をやり過ごした。後に判明したのだが〝あんごお〟というのは、早い話が「ばか」という意味なのであった。この教師は現国を教えているくせに岡山弁丸出しで、後々までぼくを苦しめた。授業中に指名されて、標準語で答えたりすると、

「ハラダ君、でえれえカッコええ言葉で喋りよるのう！　ええがええが！　どわっはっはっは！」

などとからかい半分に笑いやがるのである。これにはぼくも頭にきたが、標準語で言い返せば言い返すほど「ええがええが！」などと囃し立てられそうな気もするし、何しろ根が小心なものだから、結局苦笑いで沈黙するしかなかった。

「うううー、このままでは失語症に陥ってしまう……」

と、ぼくはずいぶん悩んだが、詰まるところ解決法は一つしかない。自ら岡山弁をマスターすることである。劣等生原田の生き残る道は、他にはない。

しかし十五年間慣れ親しんできた標準語を棄て、時に宇宙語のように感じられる方言を

マスターするというのは、結構骨の折れる作業ではあった。まず何つっても照れ臭さが先に立つ。

岡山弁の基本というのは、男の場合自分のことを「わし」と言い、語尾に「じゃ」もしくは「のう」を付けることにある。これがやけに恥ずかしいのである。例えば「ぼくの名前は原田宗典です」というのを岡山弁に直すと、

「わしの名前は原田宗典じゃ」

という具合になる。あるいは「ぼくは東京生まれですからねえ」というのを岡山弁に直すと、

「わしゃあ東京生まれじゃけえのう」

という具合になる。これじゃあまるで九十五歳のジジイの言葉遣いではないか！　弱冠十五歳のぼくにとって、このジジイ言葉を口にするのはかなりの抵抗があった。自分のことを「わし」と言うたびに、何ちゅうかこう気力が失せていくような気がしたものである。しかし岡山では五歳の子供でも、

「わしゃあアイスが好きじゃあ！」

「幼稚園があるけえのう」

などと声高に話す。まあ当たり前と言えば当たり前だが、余所者（よそもの）のぼくにとっては驚き

であった。

ところが一方で、同じクラスの女生徒たちが口にする岡山弁は、妙に艶っぽいものとしてぼくの耳に響いた。同じ岡山弁なのに、どうしてこう印象が違うのか不思議だが、とにかく女の子の岡山弁は悪くなかった。休み時間に冗談を言い合ったりしている時などに、ちょっと頬をあからめながら、

「やーん。原田君いけーん」

などと言われると、んもう無条件にこちらの頬もゆるんでしまい、

「んーんー、そうなの。いけんのねー。ぼくっていけんのよねー」

などと強くうなずきたくなってしまうのである。ただ単にぼくがスケベだったからだと言ってしまえばそれまでだが（確かにスケベだったけどさ）、それだけじゃなかったと思いたい。岡山弁を駆使する女の子は、硬質な標準語を使う東京の女の子に比べて、何だか純朴で可憐に思えたのである。これは実際に例を引いて比べてみれば明らかである。

「原田君だめだよ。止めてって言ってるでしょう」

という言葉からは、吊り上がった眼鏡をかけた生徒会長が腰に手を当てて立ちはだかっている様子が想像され、

「てやんでバカヤロ。おらおら！」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com